

「ブルーハウス検証」

—2 稿—

2026/1/13

雨森 れに

人物表

鹿野
かの
優
ゆう
友未
ともみ

(22)

収益化を目指す配信者

(18) 友未のいとこ。友未と配信している

1. 山（夜）

山の奥深く。強く風が吹く。

木々の音に混ざる、微かな女の泣き声。

鹿野友未（22）の叫び声。続いて車のドアが閉まる音。

2.

ブルーハウス・外（夜）

山の中にある、5畳ほどのプレハブ小屋・通称ブルーハウスの前。残置物のある廃墟であり、心霊スポットとして有名な場所である。

小屋から少し離れた位置に軽自動車が停車中。

車内には友未と鹿野優（18）がいる。

3. 車・車内（夜）

友未、助手席で小さくなっている。

友未 「だから、嫌だつたのに」

優 優がダッショボードを指さす。そこには友未のスマホが投げてある。

優 「手っ取り早く収益化するなら心霊スポットって言つてた」

友未 友未の足が貧乏ゆすりを始める。

友未 「でもガチなどこ行くのは違うじゃん」

優 「何もおかしくないと思うけど」

友未 「ホント、お前の思いやりないと、無理だわ」

友未の貧乏ゆすりが激しくなる。

優 「もう帰る？」

友未、足元を見る。鞄の中からボロボロの財布が覗

いている。

視線をスマホに移し、次に優を睨む。

友未 「やる」

4. （配信画面）山・ブルーハウス・外（夜）

視聴者数、1K（時間経過とともにあがっていく）

車のライトと懐中電灯の光が周囲を照らす。

友未の声「2回目の挑戦です。女の幽霊が出るって話だつたじ

やん？ さつきの泣き声、それっぽいよね」

小屋の前に到着する。

友未の声 「入るの怖あ」

窓に近づく。破けた青いカーテンがかかっている。

カーテンの隙間から室内を伺う。

生活感のある残置物に加え、おびただしい量のぬいぐるみが積み上がっている。そこにある、ひとりわ

大きい影に気がつき――

優 「入なんの」

友未の声 「いきなり声かけんな！」

優 「目的はこの中を撮ることでしょ」

優、扉に近づき、開ける。

突風。木々の揺れる音。女の泣き声。

友未の声 「ひつ」

友未がへたりこんだため、視界が低くなる。

優の足が室内へ入っていく。

友未の声 「待つてよ！」

もう一度、強く風が吹く。

ブルーハウス・外（夜）

風で揺れる茂み。

友未は片耳を押さえ、泣きそうな顔。

スマホ画面を見て、よろよろと立ち上がる。

そのまま室内へ。

5.

6. (配信画面) ブルーハウス・室内（夜）

友未の声 「ユウ！」

優が室内を観察している。

剥げかけたペンキの壁。毛布やクッション。少しの食器。残置物すべてが青色である。

ぬいぐるみも青系統のもので、目がえぐり取られている。

優、床に置いてあるガラス瓶を持ち上げる。えぐり取られた目のパーツがぎっしりと入っている。

友未の声 「何してんの……」

優 「現場検証」

優、室内を探り始める。

友未のため息。

友未の声 「ブルーハウスの中だよ。不気味すぎない？」
室内をゆっくりと映していく。

まず開け離れたままの扉。車のライトがこちらを照らしている。

次に窓。そのままぬいぐるみの山。

炊事スペースと思われる空間。

床に足の踏み場がほぼない。

優、ぬいぐるみのひとつを持ち上げる。

友未の声 「毛布とかクッショニン？ 枕？ はあるけど、どこで寝てたんだろうね」

んだよ」

友未の声 「だから取ったってことかあ」

優 「トモちゃん、これ」

優がぬいぐるみの置いてあつた空間を指さす。

小さい白磁の壺が埋まっている。

友未の声 「ちょっと待つて。これ骨壺じやん」

優の手が蓋にのびる。

友未がそれを払う。

友未の声 「こういうの触るのは、ダメでしょ。例の幽霊のペットとか：子供のとかかもだし…」

沈黙が流れる。

窓ががたがたと揺れる。

女の泣き声がはつきりと響く。

周囲を映すが、声の主はいない。

優、ゆっくりと立ち上がる。

壁や天井を懐中電灯で照らす。

優 「あそこだ」

優が壁の上部を照らしている。

通気口があり、錆びたトタンで塞がれている。

再度、風が吹く。トタンが少し浮かび、通気口から泣き声。

7. ブルーハウス・裏・外(夜)

通気口の裏側付近。

優、空き箱を重ねた上に乗っている。
通気口の外枠に力を入れ、外す。

友未、外枠を映しながら、

友未 「鑄びヤバいね。中はどんな?」

優 「中もボロボロだね。たぶん、笛みたいな原理で泣き声に

聞こえたんだろうね」

友未 「みんな、聞いた? 今まで凸してきた人たちは何やってたんでしようね」

友未、得意げに歩き始める。

友未 「私たちが検証すれば真実がわかるっていう配信。興味あるでしょ?」

友未の顔にボロ布が当たる。

友未 「うえ。なんだこれ(布を掴んで)こういうのがネットで一反木綿とか言われててさ。馬鹿みたいだよね」

布を離す。

友未 「私たちが暴いてやんよって話」

友未、ブルーハウスの周りを歩き続ける。

ボロ布が静かに揺れている。

8. 車・車内(夜)

友未、配信の終わつたスマホをしまう。

満足げな笑みを浮かべる。

友未 「最終20万人。ギフトもたっぷり」

優 「トモちゃん怖がつてただけじゃん」

友未 「ばか。こういうのは怖がつたほうがいいんだって」

優 「それで、これからもやるの?」

友未 「文脈考えろや。やるでしょ。ほら、きつさと車動かす」

優、仕方ないという様子で発進する。

× × ×

窓の外は、空が白み始めている。

友未 「そういうえばさ。窓から覗いた時、ぬいぐるみにしちゃ大きい影あつたんだよね。なんだつたんだろ」

優 「窓から見て？ そんなのなかつたよ」

友未 「ちょうど骨壺があつたあたり——」

友未が口に手を当てる。

9. ブルーハウス・室内（昼）

友未の想像。

友未、考え込むようにして動かない。
女が、ぬいぐるみの山をソファーのようにして座っている。手は埋まつた骨壺を撫でる。

10. 車・車内（早朝）

友未 「戻つて検証したほうがいい？」

友未、「深入りしすぎ」

友未、「思いやつたんだけど」

友未 「適切なタイミングってのがあんのよ。疲れた。寝る」

友未は目を閉じる。

11. ブルーハウス・裏・外（早朝）

枝にかかつたボロ布が揺れる。

布の先を辿つていくと、数メートル上の枝で骸骨が揺れている。布は色あせたワンピースがほどけたものである。

強い風が吹く。

骸骨が揺れ、女のすり泣きが響く。

おわり